SMOーソード・マジック・オンラインー

漆黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＭＯーソード・マジック・オンラインー

【Ｎコード】
Ｎ４２１３Ｙ

【作者名】
漆黒

【あらすじ】
ある日の夜、体中を焼かれるような熱に襲われる。死んでしまった方が楽ではないかと思うほどの熱に生きることをあきらめようとした時、一人の男が現れる。「その熱から解放されて生きたければ俺の話を聞け」と語る男。その男の正体は…？そしてその男とＳＭＯにどんな関係が…？そしてＳＭＯとは・・・？安心の主人公最強設定。一部残酷な描写があります。

scene1

熱い

苦しい

熱い……苦しい…熱い熱い苦しい熱い熱い熱い熱い熱い苦しい熱い熱い熱い熱い。体中が焼けるように熱い。
呼吸ができなくて苦しい。
そんな状態だ。
（あぁ、俺はこのまま死ぬのかな？）それもいいかもしれないなとおもう。こんなに熱くて苦しいなら死んだほうが楽になれるとおもったのだ。
だんだんとそんな考えが心をしめる。さっきまでの熱くて苦しかったのに、今はすごく落ち着いている。
ゆっくり目を閉じようとした。
「諦めるのか坊主？」
！！
さっきまで誰もいなかったはずだ。窓には鍵をかけていなかったとはいえここは2階だ。それなのに心地好い風が窓からはいりこんでくる。

本能では目を開けるなといっているが徐々に光がもどってくる。それと同時に熱くて苦しい症状も戻ってくる。
「もしおまえがその痛みに耐えられず死を選ぶのならこれから先のことは聞かなくていい。が、生きたいと思うなら俺の話を聞け。どうするのか今すぐ決めろ」
えっ？
男の言ってる意味がわからなかった。

生きたいなら話を聞け？それはつまり俺はまだ生きていられるということか？自分の胸をつかむ。さっきまではわすれていた熱くて苦しい症状が再び襲ってきた。だがそれでも自分が考えるスピードが落ちなかった。
「ひ・・とつだけ・・・・・聞き・い・・とが・・・・ある。」
そうしゃべるだけで今まで以上に症状が激しくなったが、うつむくことはせずに男を睨みつけるような眼で見た。
男は身長１７０ｃｍほどで年齢は２０後半から３０前半。細身で今まで見たこともない赤い眼をしていた。
「なんだ？」
俺が睨んだことが意外だったのかちょっと驚いたような表情を浮かべたがすぐに笑みに変えた。
「もし・・生きる・・とを・・・選んだのなら・・・・・この・症状か・・ら・・・解放・・・されるのか？」
「あぁ、そのことは約束しよう。」
俺はそう聞いて安堵の息を漏らした。
「そ・か。なら・・た・えは・・・・ひとつ・・だ。俺は・きたい。」
俺の答えを聞いて男はかすかな笑みを浮かべた。
「いいだろう、なら今から話をしてやる。ただしこれからする話は誰にもしゃべってはならん。いいな？」
こくん、と俺はうなずいた。
「よし、ならまず俺の正体から話しておこう。俺は吸血鬼だ。」
男はその言葉を俺にしみこませるように間をおいた。
（はっ？吸血鬼？何言ってるんだ）
と思ったが男の顔は真剣だった。その顔を見ただけでなんとなく本当のことなんだと納得できた。
そんな俺の心情を読みとったかのように男は話をし始めた。

scene2

「君のその症状の原因は簡単だ。おまえの体の中の魔力が急激に上昇していることが原因。魔力は誰もが少量だが血液とともに流れてる。だが力あるものはだいたい２０後半から３０前半のころ急激に魔力が上昇する。そうなると人の身体ではもって２時間しか耐えられないほどの魔力上昇になる。こういうやつらを救うために僕たちは世界各地で活動している。人目の付かないようにだがな。救う方法は簡単、俺たちと同じ吸血鬼になる事。それがいまおまえが生き延びることができる方法でもある。
さっき俺がもって２時間といったが、それはあくまで身体の出来上がっている人の場合。おまえの場合はまだ１０代後半で成長段階だから正直あまり時間がない。だから今すぐ答えを聞かせろ。迷えば迷うだけお前の助かる確率が減る。」
そんなことをいうのだ。
生きるには吸血鬼になるしかない。
歯を食いしばる、迷えば迷うだけ助かる確率が減るというのはおそらく本当だろう。この体がそれを知らせてきているのだから。
人ならざるものとなり生きるか、それとも人として死ぬか。
今までの人生ーわずか１７年だがーで究極の選択だろう。だが迷っている時間はない、時間がたてばたつほど俺は死へと近づいているのだから。
はっと思った。こんな考えが浮かぶ時点で答えは決まっているじゃないか。うん、そうだ俺は「生きたい。たとえ吸血鬼になっても」
俺がそう答えると男がかすかにうなずいた。
「では早速始める。苦しいだろうが両膝をついて目をつむれ。」
俺は激痛を我慢して両膝をつき目を閉じた。
トン、と背中の手が触れたとき、何かが流れ込んできた。
一時的に体が楽になったが、あくまで一時的だ。そのすぐ後に今ま

で以上の激痛が襲ってきた。その痛みに耐えられず意識を失った。

scene3

side吸血鬼男

気を失ってしまった少年を見てやれやれと思う。
「まだ説明してないこともあるというのに。」
少年をベットに寝かし布団をかけた。
「まぁいい。手紙でも書いておけば気づくだろ。」
そう思い、紙に文字を書き記す。
その紙を少年の枕元に置き男は立ち去った。
side end

ザーーーーーーー
そんな音が聞こえて目が覚めた。
「雨か・・・・・・雨ーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」
あわてて起き上がりベランダに向かう。
そこには洗濯物が干してあった。当然洗濯物は雨のせいで乾いているはずもない。そして貧乏学生である自分には服、ズボン、下着は2着ずつしかない。となると今着ている服をもう一日着なくてはならないのだ。思わずため息が漏れたのは仕方がないだろう。あきらめて部屋の中に入ると、ベットの下に神が落ちているのに気づいた。
その手紙にはこう書かれていた。

「お前がこの手紙を見ているということは無事生きているということだな。まずはおめでとうといっておく。
挨拶はここまでにしてさっそく本題に入らせてもらう
本題1　吸血鬼とは
1．普通の人間に比べて身体能力がはるかに高い。

2．吸血鬼は肉体面では成長しない。
3．いかなる傷も己の魔力で再生できる。
4．吸血鬼に寿命はない。
とまぁこんなところだ。
じゃぁ、頑張れ

追記：ＣＤ－ＲＯＭを一枚置いておく。そのディスクにはサービス開始前のとあるオンラインゲームをプレイできるようにしてある。
なお、次に俺が行くまでプレイしていろ。

と書かれていた。机の上には確かにディスクが置かれていたのでさっそくプレイしてみることにした。

scene4

ディスクを挿入し立ち上げるといくつかの質問事項が出てきた。
１あなたの名前（本名）を入力してください。
十六夜連夜
２性別を選択してください
◎男　○女
３年齢を入力してください
１７歳
４ご職業を入力してください
高校生
５以下の中からあなたの世界についての質問です。それぞれの質問に対し一つを選択してください
（１）あなたの行きたい世界
◎剣と魔法の世界　○古代の世界　○錬金術の世界
（２）モンスターの有無
◎あり　○なし
（３）ギルドの有無
◎あり　○なし
（４）ギルド間抗争
◎あり　○なし
（５）職業選択
○自分で選択　◎最適選択　○ランダム選択

お疲れ様でした。これでこのオンラインゲームは完成しました。ご協力くださいましたお客様には一足先にプレイしていただきます。
準備のほうが整いましたら実行ボタンを押してください。
となったのでドキドキする心を抑えながら実行ボタンを押した。
それではお客様を剣と魔法の世界へご案内いたします。

その瞬間目の前が真っ白に染まった。
目をあけるとそこは自分の部屋にだった。

ｓｃｅｎｅ４（後書き）

ごめんなさい。かなり短いです。
一応ここまでがプロローグになります。
ご愛読いただきありがとうございました。次話からが本編のスタートとなります。拙い文章ではありますが引き続きご愛読くださいますようお願い申し上げます。

ｓｃｅｎｅ５（前書き）

正式サービス前のお話です。
正式サービスはｓｃｅｎｅ7からを予定しております。

scene5

なんていうおちではなく、自分が見たこともない草原の上にいた。
なのになぜかこの草原がどこか知っている自分がいる、そんな奇妙な感覚に襲われている。
「ほぉ、このウェイデン草原に召喚されるとは驚いたな。ここは一番召喚されにくいよう設定されておったんじゃがな。」
と、突然声をかけられ後ろを振り見くと白髪白ひげの年寄りに見えるが、体つきは無駄なく鍛え抜かれた体つきをしていた。距離をとるように後方へ一歩飛びのいた。自分と相手の力量差を考えると絶妙な距離感を取ったことに目の前の老人は「ほぉ」と感嘆の声を漏らし、目を凝らした。
「なるほどのぅ」
老人のその言葉の直後楽しそうな笑みを浮かべた。
「ハワードの言っておったことはこの事じゃったか。確かに面白い少年じゃ。」
老人のその言葉に俺は全く意味がわからなかった。
「初見で人のことを面白いという爺さんは何者だ？」
「ふぉっふぉっふぉ。わしはここに召喚されたものに剣と初歩の魔法を教えておるジークというものじゃ。よろしくの連夜君」
！！！
どうして俺の名前を、と言おうとした俺に「どうしてお主の名前を知っておるかは、そうじゃのう・・・お主がここを卒業できるほどの実力を得た時まで秘密ということでどうじゃ？」
わずかに口の端を釣り上げて挑戦的な笑みを浮かべている。
そんな笑みを浮かべられて断れるほど俺はできていない。
「いいぜ、爺さん。その挑戦を受けてやる」
こちらも挑戦的な笑みで返す。
「では早速始めるとするかの。まずはほれ」

といって短い木の棒を1本投げてきた。
それを右手でキャッチする。
「お主の実力を見るためにまずは組み手じゃ。」
な・・なんて無茶苦茶言いやがる。こっちは少しも剣術なんて習ったことはないんだぞ。
「では、ゆくぞ」
そういった瞬間さっきまで爺さん（ジーク）のいたところに土煙がわずかに出来上がっていた。
とっさに剣を正面に据える。
「ほぉ、今のを防ぐとはなかなかやるのぉ」
なんてほめてくるが冗談じゃない。今の動きが見えるわけがない。事実今のを防げたのは運が良かっただけだ。
その証拠に次の背面からの剣をかわせなかった。
「なんじゃ、初撃を防いだから少しスピードをあげてみたが全くついてこれんとはのぉ」
と言ってため息をつかれた。
「ふざけんなこのくそ爺。初撃が全く見えなかったのにスピードを上げた2撃目を防げるわけねーだろ。第一こっちは一度も剣なんてもったこともねぇんだよ。」
ここで怒るのは仕方がないだろう。初体験で説明なしでいきなりできるなんて漫画やアニメの主人公ぐらいのものだ。
「なんじゃと！！今の時代はそんなにまでへっぽ子になり下がっておったか。まぁよい、まずはお主から鍛えて灸をすえてやらねばなるまい。」
この日から地獄のような特訓が始まった。

scene6

「よしここまでじゃ。」
そんな爺の言葉でようやく腰を落ち着ける。
「今日でもう2週間になるが、やっと形になって来たのう。」
俺には剣の知識など皆無だが2週間で形になったのは褒められるべきじゃないか？
「現実世界では見事な進歩じゃと褒めたじゃろうが、この世界ではせいぜい上の下といった成長スピードじゃ。」
「上の下なら平均以上じゃねえか！！充分だろくそ爺！」
正直いい返せる体力も残ってなかったが人間やる気になればある程度のことはできてしまうものだ。
「何を言うか。わしの道場に来た以上そんなことは許さん。わしのところに来る者はこの段階まで1週間でおつりがくるわぃ。それをどうじゃ、お前は2週間でやっと及第点という所じゃ。このままでは1ケ月のハンデがあってもやっと上位の連中と互角にやりあえるかどうかになるぞ。」
「上位の連中と互角にやりあえれば上等じゃねぇか！！おれにしては爺の訓練に耐えれていることをほめてやりてぇとこなんだよ。」
「まだ言うか。なら次の段階の修行を今から始める。」
なんてこといいやがる
両手のこぶしのぎゅっと握る。
「ふざけんな爺。こっちはてめえのバカみたいな修行でへろへろなんだ。いい加減寝かせやがれ。」
「そんだけ言い返せれば充分じゃ。ほれ」
そういって今まで使っていた木の棒とまったく同じ長さの木の棒を投げてきた。
「この木の棒は今まで使っていたのと同じじゃねぇか。」
「このたわけ！わしが教えるのは双剣じゃ。いままでのは本当の基

礎の基礎、ここからが本当の修行じゃ。」
背中から嫌な汗が流れる。
今までのが基礎の基礎の修行の量とはとても思えないがそこで納得すこともある。
「なるほどな。だから剣を片手で持てと言って一日おきに持ち手をかえさせてたのか」
最初から感じていた疑問がやっと解消されていく分すっきりした。
「ほう、気付いたか。つまりはそういうことじゃ。さぁたて、ここからが基礎修行の開始じゃ。」
やんなるねぇ、まったく。
そう言って立ち上がり爺の素振りをまねて素振りを始めた。

サービス開始まであと2週間

ｓｃｅｎｅ６（後書き）

ごめんなさい。サービス開始まであと一話か二話ほどください。

scene7

sideジーク

恐ろしい上達スピードじゃのぅ。
基礎の基礎の訓練を終えるのに2週間もかかったかと思うと双剣の振りがわしの真似だったのが、今や自らに合った振りをしておる。
そろそろ武器を与え、洞窟やダンジョンに入って本格的に動いていいとさえ思える。
まぁ、まだわしが確認せにゃならんことが一つのこっとるが・・・・・さてどううしたもんかのぉ
あ奴が来て今日で20日目、開始するまでもう時間がないのは確かじゃ。じゃが実力がつくまであまり無理をさせるわけにはいかん。
となれば
「よし、そこまでじゃ。」
わしが声をかけてしばらくすると素振りをするのをやめる。
「なんだよ爺、いまいいとこだったのに。」
と不機嫌MAXの顔で言ってくるのも楽しいもんじゃ。
「今日でお主が来てから20日目じゃが、そろそろ実戦に入ってもいいレベルにはなっておる。」
一瞬困惑顔になったが
「やっとかよ爺。待ちくたびれたぜ。」
その次には嬉しそうな顔を浮かべる。
「ただし・・・明日わしと本気で組み手を行いわしの体のどこでもよい、一撃かすりでもしたらじゃ。」
「なるほど、いいぜ爺さん。今までのストレスを発散させてもらおう。」
こやつめ、なかなか言うようになったもんじゃい。
「はん、そのストレスはお主が未熟だからじゃ。うまくできておる

もんにダメだしするやつはおらんじゃろう。」
「この爺」
まだまだ修行が足りんがのう
「では今日は終わりじゃ。」
ｓｉｄｅ　ジーク　ｅｎｄ
正式サービスまであと９日

首に殺気を感じしゃがむと剣が通過していく。安心するには早い、剣は２本あるのだ。
剣を頭上に構え上から降り下ろされた剣を防ぐ。
だが徐々に圧力が増し支えきれなくなる。そのまえに、一瞬力を込めて剣を浮かせると後ろに飛んで体勢を立て直す。
「ほぉ、ずいぶんといい動きをするようになったじゃないか。」
そういいながらも決して攻撃が止まる事はない。双剣の強さは手数が多く小回りが利くことだ。大剣や槌にくらべ威力が落ちる分手を止めることは褒められることではないのだ。
「あたりまえだ。こっちはあんたをぼこぼこにして今までのうっ憤を晴らしたくて仕方ないんだからな。」
そう答えながらも必死によけるあるいは弾いてかわす。
攻撃できないことにいらつきながらも決して顔に出すことはない。
「よけてばかりでは勝てぬぞ。」
そんな挑発までしてくる。
「うるせぇ。こっちは作戦考えてんだ。邪魔するな爺。」
やれやれとため息をついたのが分かった。
「作戦ならいくらでも立てようがあったじゃろうに」
「何だと爺。俺がバカと言いたいのか？」
「あぁ、そうじゃ。お前は馬鹿じゃ。」
この爺
「なぜわしが寝とる間に襲いにこなんだ？なぜわしが来る前に罠なり何なりを仕掛け何だ？」

「どういうことだ？」
俺が真顔で聞き返すと
「やれやれそんなこともわからんのか。いいかわしは今日テストをやると言ったが、何時開始とは言った覚えはないぞ。」
なるほどな。つまり俺は奇襲なり罠を使ったりしなきゃ一本獲れないと思われてるのか。
「ずいぶんと舐めてくれるじゃねえか爺。俺がいつまでもやられっぱなしだと思うなよ。」
「はっ、やれるもんならやってみろ」
その次の瞬間、勝負がついた。
サービス開始まであと８日と１２時間

ｓｃｅｎｅ８（前書き）

次話から正式サービス開始予定です。

scene8

「お主、いまなにをしたのじゃ？」
爺の顔から冷や汗が流れている。その顔には信じられないとかかれている。
「簡単なことだ。ヴァンパイアの血を活性化させただけだ。」
あの男の思惑に乗るようで必死になってヴァンパイアの血を抑えていたがもう限界だったみたいだな。
「そうか。ならわしが確かめたいことは終わった。ついてこい。」
そう言って建物の中へとはいっていく。
建物の中は剣や鎧が所狭しと置かれていた。
「どんだけ集めてんだ」
ぼやきながら踏まないように爺の後をついていく。
と、扉の前で立ち止まった。
後ろを振り返り俺がいるのを確認すると扉を開けた。
そこには左から赤、青、黄、白、茶、紫、蒼の7色の双剣が置かれ、蒼の双剣の後に同じ色の大剣が置かれていた。
あまりにきれいな剣に言葉が出なかった。
「ふん。さすがにこの剣を見て驚くことはできるようだな。
「あ・・当たり前だ爺。なんだこの色の剣は？」
爺が真面目な顔をして
「これはエレメンタルソード。さまざまな属性が宿った最高峰の剣じゃ。左から炎、水、雷、風、地、毒、氷の属性が宿っておる。この剣は４０００年もの間誰一人としてこの剣を持つことができなかったとされておる。認められた者のみが扱うことができる剣というわけじゃ。さて説明はここまでじゃ。好きな剣を選べ」
「どんだけもらってもいいのか？」
俺が疑問を口にすると「好きなだけ持っていくとよい」といったときはさすがに驚いた。

「さぁお主が選ばれたものかどうか見せてみよ」
その言葉とともに一歩進み出た。
左から順に回る。
紫の双剣の前に来た時、剣が脈を打ったような気がした。おもわず紫の双剣を握る。
そして再び、ドクン　ドクンと剣が脈を打った。
「おぉ、ようやく、ようやく現れた。エレメンタルソードに認められし者が。」
と目にかすかに涙を浮かべてみている。
いまだに剣は脈を打っている。
それが徐々に弱まり、止まったのを見てそれを腰にさした。
そして再び別の剣を見て回る。
結局反応を示したのは紫（毒属性）の双剣のみだった。
「これでお主は旅立つのに必要な武器を手にした。これからも鍛錬に励みその剣に見合った強さを手にしなさい。
合格じゃ。」
爺が・・いやジーク師匠が今まで見たことのない笑みを浮かべていた。
その顔を見て俺は思い切り頭を下げた。
「いままでありがとうございました。」
俺はそう言って最高の師匠に背を向けて道場を後にした。

そして俺は正式サービスが始まるまで洞窟やダンジョンで実戦経験を積んでいった。
そしていよいよ正式サービスが始まる。

ｓｃｅｎｅ８（後書き）

いよいよ次話から正式サービススタートです。
お楽しみに～

ｓｃｅｎｅ９（前書き）

いよいよ正式サービス開始です。

scene9

午前９時
いよいよＳＭＯの正式サービス開始時間になった。おそらく全国のユーザが一斉にゲームを始めるだろう。
「そういや、あの設定を決めるのはめんどうだったなぁ」
なんて口にしながら俺もＳＭＯの世界へログインした。
そこは見慣れた俺がいつも借りている宿屋だった。ＳＭＯをログアウトするときは必ず自分の部屋かギルドの中でログアウトしなければならないというルールがありとても面倒なのである。
「さてとそろそろ準備して日課をこなしますかね」
といって剣を腰にさし一階に降りてマスターに食事を注文する。このゲームは身体ごとゲームの世界に入る完全フルダイブ型オンラインゲームなので飯は現実世界でとろうが、ゲームの世界でとろうがかわらないのである。俺は一人暮らしなので基本ゲームの中で食事をとっている。今日の俺の朝飯はＨＣとトーストにサラダと茹で卵といういわゆる喫茶店のモーニングだ。値段もこの宿屋に泊っていれば朝の１０時までは無料となっているから便利だ。俺は食べ終えるとお弁当を注文した。お弁当はおにぎりと唐揚げとたくあんそしてお茶だ。このお弁当は今はまだ注文する人は少ないだろうが参加者がダンジョンに潜り始めるとかなり増えるだろう。料金は２００Ｊと安い。これを持って午前中はひたすらに素振りを行い、午後からは初心者用ダンジョン（レベルＥ）攻略。それが俺の日課だ（ちなみにいま高校は長期休暇中）。日課といってもまだ一週間ほどしか続けていないが・・・。いつものように裏庭を借りるようにいうと宿屋を出て裏庭に向かい、素振りをする。素振りをするときは何も考えない。ただただ剣を振る機械のように。そうすることで一切の無駄のないまるで教科書通りの剣の振り方になる。だがこれでは敵を倒すことはできない。敵を倒すにはここからさらに自らの動き

に昇華させなければならない。そうすることできれいだがどこか拙かった剣の振りが滑らかな軌跡を描き始める。この領域になってはじめてソロでEランクの敵と互角に戦うことができる、といった具合だ。
さて何人がトッププレイヤーとして活躍できるかな？と考えるが考えるだけ無駄だと悟り素振りを続けた。

そして時刻は正午を少し回ったころ俺はダンジョンを入り口に来ていた。ここまできてもモンスターはいない。Eランクダンジョンでは入口から5分ほど歩かなければ遭遇しないよう設定されている。
食事を終えた俺は少し休憩した後ダンジョンに潜っていった。

scene10

ダンジョンをクリアし街に戻ると何やらプレイヤーたちが騒いでいた。
なにかあったのかとおもい近くにいた男性に話しかけると「なんだ、気づいてねぇのか。ログアウトできねぇんだよ！！」
！！！！
「どっ・・どういうことだ！！」
さすがにこれには焦った。ログアウトできない＝現実世界に帰れないということだ。俺は男に礼を言い急いで自分の借りている宿屋に向かった。その途中でもプレイヤーたちは騒ぎ続けていた。

宿屋に着くとそのまま自分の部屋へ行きログアウトと心の中で言うが現実世界に戻れない。
何度も何度も言うが一度もログアウトできなかった。

翌朝目を覚ますと自分のベット（ゲームの世界のベット）の上で横になっていた。どうやら昨日は寝てしまったらしい。といっても汗臭さはないからどうやら風呂には入ったようだ。
とりあえず朝飯を食おう。ログアウトできないということを考えるのはそのあとだなんて思いながら朝飯を食べていた。そんなときだ
「ごきげんいかがかなプレイヤー諸君。」
なんて声が頭の中に直接響いた。いわゆるシステムボイスというやつだ。
周りの様子を見るとどうやら一斉送信されているようだ
「私はこのゲームの管理責任者のバルドフェルトだ。
さて挨拶はここまでにしてさっそく現状について説明しよう。諸君らも知っての通りログアウトできないのはこちら側のミスだ。まずはそのことを詫びよう。

現状ログアウトできるようになるには少なく見積もっても5年はかかるとされている。無論我々も全力を尽くす。ですがしばらくは皆さんにはこちらで生活していただくことになる。このことは現実世界の人たちには通達済みです。」
この言葉とともにあたりは激しい喧騒に包まれた。
それでもシステムボイスでの説明は続いていく
「現状我々が君たちにしてやれることは少ないが、少ない中でも出来る限りのことはする。まず諸君らにはいくつかの魔法をプレゼントする。誰にどのような魔法が送られるかは我々も把握できない。むろん魔法の種類はそれぞれ違うが、全く使えないということはないはずだ。私からの連絡が終わり次第インプットされるようになっているから後程確認してみてくれ。
そしてもう一つ。この世界に武器は剣と杖しかないが諸君らにはそれ以外の武器をプレゼントする。無論この武器も誰にどのような武器が贈られるか我々にもわからない。この武器も私からの連絡が終わり次第諸君らのもとに一斉に送られる。
現状で我々ができるのはこれだけしかない。プレイヤー諸君、無責任かもしれないが決してあきらめないでくれ。必ず、必ず諸君らを現実世界に帰す。そのことはこの場所で誓う。
私からは以上だ。」
バルドフェルトの言葉が終わると頭が一瞬痛んだ。
頭にいくつかの魔法名が浮かぶ。
1　氷柱の魔弾
2　サンダーボルト
3　エクスプロージョン
4　ウィング
5　毒の世界
6　毒の付与
7　解毒
8　操糸術

という名称とともに効果も頭にはいってきた。
どうやら攻撃特化型なようだ。
送られてきた武器を確認すると予想通り鋼でできている糸だった。

ｓｃｅｎｅ１０（後書き）

魔法の効果については追々ということで

次話からチートが本格化される（予定）です

そろそろヒロイン出していこうかなぁと考えている筆者でした。

ｓｃｅｎｅ１１（前書き）

１１話目にしてようやくヒロインの登場です

scene11

正式サービスから2ヶ月
プレイヤーたちはパーティーを組んだりギルドを結成するなどしてこちらでの生活を本格的に始めた。
そんななか俺は1ヶ月のアドバンテージを活かしソロで活動していた。そんな日の朝俺はいつものように朝飯を食べていると
「ねぇ君、ずっとソロで活動してるよね。」
と声をかけてきた。
「私は“パラディン”というギルドに所属しているリサっていうの。君は？」
と笑顔を向けてくるがどこかこちらを試しているような眼だ。
パラディンはカオスナイツとシルバーエンブレムと並びギルドのトップ3といわれるギルドだ。
「俺はレンヤ。ソロだ」
そういってHコーヒーを一口飲む。
この女はひと月ほど前から俺のことをさりげなく見ていた。おれには隠しておかないといけない性質があるから極力目立たないようにしてきたが、どうやらそれが裏目に出て目をつけられていたようだ。
「今日もダンジョンに潜るんでしょ？私たちもダンジョンに潜るつもりだから一緒に行かない？あっ、ちゃんと男の子もいるから心配ないよ？それとも女の子だけのが良かった？」
なんて遊ばれてしまった。
「申し出はありがたいけど、今回は遠慮させてもらう。」
すこしおどけて返す。
「そぅ、残念だわ。じゃぁ今日私と一緒に潜るメンバーだけ紹介させて？それだけでいいから」
なんて片目をつむってお願いされる。
正直だるいがこれ以上時間を取られたら予定が狂うなと思いその申

し出を受けることにした。
そのメンバーを今から呼ぶからと言われこの場で待つよう言われたがそろそろ時間になってしまうのでそのメンバーがきたら裏庭に来るように言いその場を後にして裏庭に向かった。

〜ｓｉｄｅリサ〜
「そぅ、残念だわ。じゃぁ今日私と一緒に潜るメンバーだけ紹介させて？それだけでいいから」
私がそういうと彼は一瞬迷惑そうな顔をしたけどすぐにい了承してくれた。どうやら彼は自分の予定が崩されるのが好きではないようだ。
彼が裏庭に向かうと私はすぐにメンバーのナミとケンたち８人に連絡を入れた。
私が集合場所を言うとみんな１０分程できてくれた。
そのまま裏庭に向かった。
裏庭からは風を切り裂く音が聞こえた。おそらく素振りでもしているのだろうと思い気配を消して近づくようにみんなに言い、自らも気配を消す。
でも私たちがあと数歩で裏庭に着くというところまで近づくと途端に風を切り裂く音が途切れた。
そして私たちが裏庭に着くと彼はこちらを睨んでいた。
〜ｓｉｄｅリサｅｎｄ〜

scene12

裏庭に着くとさっそく素振りを始めようと剣を抜き念のために鋼の糸（鋼糸）を周囲５０ｍにクモの巣状に配置する。これは少し前に偶然わかったことだが、鋼糸は感覚器官の代行ができる。つまり鋼糸を周囲にばらまけばそれだけで地上にいるものに限られるが索敵ができる。さらに魔力を適量流すことで離れたものと話したり、声を聞いたりすることもできるというかなり便利な武器だ。
鋼糸を配置し終えたら素振りをはじめる。今日の体調に合わせて微調整しながら双剣を振っていると、鋼糸に反応があった。その後すぐに気配を探るが、気配が全くない。そのことに警戒心を強めながら相手が近づいてくるのを待つ。鋼糸の伝わってくる感じではおそらくまだ４０ｍほど距離がある。
徐々に素振りをするペースを緩めあと数ｍというところで素振りをやめ相手が近づいてくる方を睨みつける。

最初にあらわれたのはリサだった。リサが一瞬驚いた顔を見せたがすぐに最初に話しかけてきたような笑顔になった。リサの後を追うように８人姿を現した。
「ごめんね、待たせちゃって。」
などと気配を消してきたことを棚に上げてはなしかけてきた。
「あぁ、前置きはいいからさっさと用件だけすませよう。この後も予定が詰まってるんだ。」
なんて俺が言うとリサを含む９人が軽く睨んできた。
「そうね。じゃぁまず私はいいとして、私の隣からナミ、ケン、レオン・・・・・よ。今日はダンジョンのボスを攻略することが目的だからこれだけの人数なの。よろしく」
なんて言葉で占められた。
ちなみにトップ３のギルドの一つと言われているがまだまだ初心者

用のダンジョンボスをソロでは倒せないレベルだ。とはいえ初心者用のダンジョンボス攻略にこれほどの人数を割くとは思わなかったが・・・

「俺はレンヤ。ソロだ。さて、これで約束は果たしたから、俺は失礼する。」

といって必要以上かかわろうとせずに立ち去ろうと歩きだした。

「てめぇ、さっきからいいかげんにしやがれ。俺らパラディンをなめてんのか！！」

と、突如パラディンのメンバーの一人確かレオンだったかが怒鳴りだした。

「落ち着きなさい、レオン」

となだめるように声を出したのはリサだった。おそらく彼女がこのパーティーのリーダーなのだろう。

まだ何か言いたげだったがしぶしぶおとなしくなった。

「ごめんね連夜君。急に怒鳴ったりしちゃって。わざわざ時間とらせてしまってごめんなさい。」

と謝ってきたので俺は気にするなと言って歩き出した。

scene13

リサたちと別れて1時間ほど歩き初心者用のダンジョンに来た。
今日からはいよいよ応用編に入る。
いままでは剣だけでクリア→鋼糸だけでクリア→魔法だけでクリアを繰り返してきた。
そしていよいよ今日からはこれらを組み合わせた闘い方をする。
これが終わったら中級ダンジョンに行く予定だ。
この段階が終わるのには2週間はかかるだろうと思われる。
これだけ時間をかければ上級ギルドは中級ダンジョンの攻略に挑んでいることだろう。
さてさっそくはじめるか

ダンジョン内にて
最初に出現するのはネズミが2足歩行して手（いわゆる前足）に初期装備の剣と楯をもった1mほどのモンスターが5匹だ。はじめてきたときはいきなり5匹もいて驚いたもんだ。
さっそくためしたくてうずうずしていた技を発動する。
氷柱の魔弾
30cm弱の氷柱が1つ出現する。そして1匹を目指して放つ。この技の弱点は直線にしか放てないことだ。だがそれを補って余りある速度なため防ぐのは難しい。
案の定氷の魔弾は1匹目の腹を斜め上から貫通した。氷の魔弾の最大の利点は防御の薄いものを貫通させても砕けないこと。さすがに地面にぶつかれば砕けるが、この程度のモンスター5匹なら十分耐えられる。たださきにものべたとおりこの氷柱の魔弾は直線にしか放てない。
その弱点を克服するために考えたのが鋼糸をはじめから氷柱の魔弾に目立たないように巻きつけ手動で操るようにすればいいのだ。だ

がこの方法はタイミングがとても難しい。早すぎれば貫通できないし遅すぎれば地面に当たって砕けてしまうのだ。この辺は何度も実戦を繰り返していくしかないだろう。現にさっきの氷柱の魔弾は地面に当たって砕けてしまった。

２匹目３匹目と挑戦するが失敗。

結局５匹ともに失敗してしまった。

今回はボスにとどめをさすときにかろうじて地面に当たる数ｃｍ前で何とか止めることができただけだった。

scene14

俺が街に着いたのはおそらく１６時を少し回ったころだっただろう。
街は静まり返っていた。
普段なら活気にあふれているのに街には人っ子一人おらず店もしまっていた。わけがわからず俺は自分が泊っている宿屋に向かった。
正面入り口はしまっていたが、俺は裏口から入りマスターに事情を聴いた。
「今朝おまえがダンジョンに向かっていった３０分後ぐらいにグラニール山で盗賊が出るという噂が広がってな、パラディンのメンバーが１０人ほど向かったんじゃ。
じゃが、いまだに誰一人帰ってこんのじゃ。それで街の皆は全滅してついにはこっちまで押し寄せてくるんじゃいかと店を閉めて閉じこもってしまったというわけじゃ。」
１０人ということはおそらく今朝リサに紹介された１０人だろう。
みたところそれなりに実力がありそうだったので盗賊程度なら十分全滅させることはできるだろう。考えられるのはまだアジトが見つからない、想像以上に盗賊団が強く全滅した、あるいは・・裏切り者がいた。というかんじだろうが詳しくは当然分からない。
正直助けてやる義理はないが、知ってしまった手前なにかしなければならないだろう。
マスターに俺が様子を見てくるというと「おまえひとりで行くつもりか？ならやめといたほうがいい。いまパラディンとカオスナイツとシルバーエンブレムの合同パーティーが捜索と援軍として数十人を向かわせた。」
俺以外の連中なら安心しただろうが俺の予想ではそれでもいやそもそも実戦経験が足りないだろう。あそこには上級ダンジョンに通ずる道があり、そこに入ると竜種をはじめとした桁違いに強いモンスターがいる。

思考がいやな方ばかりに向かうのを止められなかったが、情報をくれたマスターに礼を言い外に出た。

普段なら目立つから使わないが今は非常時なのでしかたなくウィングの魔法を発動した。

この魔法は飛行魔法だ。グラニール山までは歩くと2時間かかるがこの魔法なら15分あれば到着できる。

額に汗をかいているのを感じながらグラニール山に向かった。

～ｓｉｄｅリサ～

レンヤ君がダンジョンに向かって30分程経ったときギルドマスターから急遽グラニール山に出るらしい盗賊団が現れるようになったらしいのでその討伐に向かってほしいと言われ私たちはグラニール山に向かった。

グラニール山のどこにいるのか全く分からなかったので私たちは適当に歩きまわった。時間にして1時間ほど歩いたところでいったんお昼休憩をとった。メニューはおにぎりと現地で温めたスープ。少し少ないけれどあまり食べすぎてもいざという時に動けないので我慢した。その後4時間ほど歩き続けたけどまったくと言っていいほど反応がない。デマなんじゃないかと思いどうするか相談しようとしたが、体が動かなかった。私だけでなくナミとケンも同じだった。でもレオンたち6人は全く平気だった。しかもレオンは笑みを浮かべていたのだ。私はわけがわからなかった。

「ようやく、ようやくアンタラ2人を俺のものにできる。」

なんて言った時には私の頭は真っ白だったけどナミが動きにくい体をなんとか動かして非常時用のフラッシュの魔法を放った。その魔法は空に向かいその後強烈な光を放った。

この光を見た後私は何も考えることができなくなった。

～ｓｉｄｅリサｅｎｄ～

scene15

グラニール山の中腹付近上空でフラッシュが放たれた。あそこなら急げば数分でつくと判断し加速した。
グラニール山は標高１０００ｍと高く山幅もある。もしさっきのフラッシュがなければ見つけることは翌日になっていただろう。
中腹付近となると上級ダンジョンの道に入ったわけではないようだ。となると考えられる可能性として一番高いのが裏切り者がいて待ち伏せされたといったところだろう。
そんなことを考えながら目的地まで必死に飛ぶ。とグラニール山のほうから何かが飛んできたと認識したときには俺のちょうど５ｍ前で止まっていた。目深にフードをかぶっていたので顔は見えないが体つきからおそらく男だろう。
「やぁ少年、少し話でもどうだ？」
なんて言葉を投げかけてきた。罠か？と疑ったが目の前の男からはそんな気配はみじんもない。
「悪いが急いでるんだ。そこをどいてはくれないか？」
「まぁそう言わずに。どうやら少年、君は複数の属性の魔法が使えるようだがやめておいたほうがいい。君に向いているのは毒属性の魔法。それ以外の属性を持つと自分に合った属性の威力を弱めることになる。」
なにをいっているんだ？それが俺が抱いた感想だった。
「なぜおまえにそんなことがわかる？」
当然の疑問だが、俺は何となくその答えを予想していた。
「私も複数の属性魔法をあつかうことができる。そしてそれがけっして良い結果にならないことを知っているからだ。」
予想通りだが、それだけでは説得力としては弱い。
「ただお前が失敗しただけだろう。なのになぜおれもそうなると決定づける！！」

俺は飛びかからん勢いで言葉を投げつけた。
「私以外にも複数の属性魔法を扱うものを多々見ている。そしてその者たちの誰一人として成功しなかったからだ。」
言葉を紡げなかった。それどころか頭が真っ白になっていた。複数の属性魔法が使えるのはかなり有利だろう。
当然弱点もある。
複数の属性魔法を扱えるということは一つ一つの属性魔法の技に深度はかなり浅くなってしまう。今の俺は広く浅い闘い方だ。
だがこの男は俺に狭く深い闘い方をしろという。そうしなければ必ず失敗すると、そう言っているのだ。
どうしたらいいかが分からない。だがどうしたいかは何となく答えが出ているような気がした。
「どうやら急すぎたようだな。1日やる。もし私のいうやり方でやりたいというなら明日もう一度この場所に来るといい。少年が今のままがいいというなら好きにするといい。じゃぁな、急がないと嬢ちゃんたちが危ないぞ」
男は立ち去った。だがしばし動けなかった。

一体どれだけ茫然としていただろう。かなり長くしていたようなきがする。空は曇っていたのに一瞬雲の隙間から太陽が顔をのぞかせた。
その光がまぶしくようやく俺は気を取り戻した。
「って、こんなとこでぼーっとしてる場合じゃねぇ。いそがねぇと」
さっきのことはとりあえず思考の外において目的地を目指した。
目的地、つまりリサたちのところが近づいたところで地上に降り音をたてないようにすばやく移動した。
すぐにリサたちのところに着くことができたが動くことができなかった。
リサとナミが下着姿になり、レオンたちがまずは俺からだ。ずりいぞ俺からだ。なんて言っていたのだ。

だがそこで人数が９人しかいないことに気付いた。
マスターの話では討伐隊は１０人のはずだ。だがいまは９人しかいない。あと一人はと探したらレオンたちの後ろでケンが血を流して倒れていた。
おそらく死んではいないが、そう長くはないだろう。
すぐにでも治療しなくてはならないだろうが、相手の人数が多いうえにリサたちを人質に取られでもしたら面倒だ。
この場面でとれる集団は少ないがどれが最善かを考える。
相手の意表を突くかそれとも視界を奪うか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4213y/

SMOーソード・マジック・オンラインー

2011年11月19日12時59分発行